

令和2年度 小平市立小平第十二小学校 学校評価報告書

学校教育目標

「明るく元気でたくましい子」「よく考えずんで実行する子」「たがいになかよくする子」を教育目標とし、「子どもも、大人も、みんなの笑顔があふれる学校」を目指す。

目指す学校像(ビジョン)

- 【目指す学校像】 子どもも、大人も、みんなの笑顔があふれる学校
- 【目指す児童・生徒像】 子どもが夢を描き、心弾ませて通う学校
- 【目指す教師像】 教職員が働く喜びを実感し、誇りをもてる学校

前年度までの学校経営上の成果と課題

- ・「十二小スタンダード」をもとに、統一した学校生活ルールで指導を家庭と連携して行っていく。特にあいさつ運動に力を入れ、家庭・地域の方々と連携し進んで挨拶する児童の育成を図る。
- ・学校支援コーディネーターの活用を進め、学習支援ボランティアの充実やスクールサポートスタッフの活用を通じ、教員の働き方改革を進めるとともに外部人材を活用したよりよい授業を行っていく。

	具体的方策	第1回評価		課題と対策	第2回評価		学校関係者評価	課題と次年度以降の対策
		努力目標	成果目標		努力目標	成果目標		
学力向上	十二小タイムやモジュールで、東京ベーシックドリル等を活用した補充的学習を充実させる。	4	4	十二小スタンダードの診断テストで80%以上の児童が80点以上を取ることができた。80点未満であった児童への指導に根気よく取り組み、引き続き基礎学力の定着を図っていく。	4	4	・基礎基本の学力は定着しつつあると思う。引き続きの取組と基礎が定着していない児童への指導の工夫をお願いしたい。	来年度は、今年度より十二小タイムの回数を増やす予定である。診断テストで苦手な部分を明らかにして、効果的な補充学習を行っていく。十二小タイムを行っていないけやき学級担任や専科教員が2-6年の各担任と協力し、基礎学力が定着していない児童の指導を積極的に行う。
	課題解決的な学習を進める。	4	3	83%の児童が自分の意見をよく発表したり、友達のことをよく聞いていたりして答えていた。コロナ禍でグループ学習が難しいところもあるが、可能な範囲で課題解決型の学習に取り組んでいく。	4	3	・コロナ禍での授業のやり方の工夫を期待したい。 ・宿題が毎日の家庭学習の充実につながっている。	課題解決的な学習を進めるためには、児童同士の交流が欠かせない。コロナ禍のため、以前と同じような話し合い活動はできない部分もあるが、ホワイトボードや、来年度から導入される一人一台のPCを活用しながら意見交換をするなど、課題解決的な学習を進めていきたい。
体力向上	体育授業においても課題解決的な学習を行い、主体的に学習に取り組めるようにする。	4	4	90.5%の児童が運動を楽しみ、力いっぱい運動できたと感じている。苦手な児童も主体的に運動に取り組めるよう、校内研究を通して授業改善に取り組む。	4	4	・新型コロナウイルス対策の徹底と工夫で指導の成果が表れていた。 ・苦手な児童も楽しんで運動できる指導を、引き続きお願いしたい。 ・保護者とも食育の大切さを共有したり、協力を得て改善を図ったりしてほしい。	コロナ禍のため子どもたちの体力が低下していた。また体育に関わる教育活動に制限があったこともあり、十分な指導ができたとは言えない。来年度は「子どもが「楽しい・もっとやりたい・できた」を感じられる体育学習」をテーマに校内研究も進め、体力向上を目指す。
	給食指導を充実させ、バランスよく食べ、健康な体作りの大切さを指導する。	4	3	給食を残さずにバランスよく食べていると答えた児童は83.9%で、苦手意識を感じている児童も少ない。日々の給食指導時などに食育を進めるとともに、保護者会などで家庭への呼びかけも行っていく。	4	3	・学級での食育指導や給食のクイズなどの取組で成果が表れている。	給食では個人差が大きく、偏食がある児童もいた。学校から家庭に学校便りなどを通して発信することで、食育や健康な体作りの大切さを目指して共に取り組んでいけるようにする。
健全育成	「十二小スタンダード」をもとに、統一した学校生活ルールで指導を進める。	3	3	81.1%の児童が意識できていた。教員間でも十二小スタンダードの内容を再度確認し合い、取組に対して丁寧な指導を続けるとともに、守ることの大切さを考えさせ、実行できるようにする。	4	3	・挨拶ができる児童が増えているが、保護者や地域も含めた取り組みも期待したい。 ・ルールを守ること、命を守ることにしているさらなる指導の工夫をお願いしたい。	代表委員会の児童が挨拶等の課題解決に向けて主体的に動いたことにより、改善されてきた部分もあった。自分や学校の課題を、児童自らが把握し、改善に向けて取り組むことが大切である。来年度も、委員会活動や学級指導等で十二小スタンダードを定着させていきたい。
	いじめ調査の実施(各学期)、校内委員会による組織的対応(定期及び臨時)を行う。	4	3	87.8%の児童が、いじめに対して児童も教員も取り組んでいると考えている。引き続き、日頃の児童観察やふれあい月間での実態把握などを通して、学年やブロックでいじめ防止の取り組みを進めていく。	4	4	・いじめゼロを目標に、教職員が一丸となって、対応や対策に取り組んでいくことを引き続きお願いしたい。	日頃から丁寧に児童観察に取り組み、コロナ禍における児童の心の動きや変化などを日常的に察知できるようにしていく。また、学年間のみならず、学校全体で情報共有を図り、いじめ防止に組織的に取り組んでいく。
特色ある学校づくり	ICT機器を活用できるように環境整備を行うとともに、効果的な実践の情報交換をし、情報教育の力を高めていく。	3	3	児童の満足度は87.9%で、教員が分かりやすい授業を目指してICT機器を活用することが日常的になっているが、コロナ禍において難しい面があった。ICTの効果的な活用ができるように環境整備や実践の情報交換等を積極的に行っていく。	3	4	・ICTの活用で子どもたちが分かりやすくイメージしやすい授業がされている。新設のPC室を活用して、分かる授業の確立を目指してほしい。	新設のPC教室ができ、新年度にはスクールGIGA構想により一人一台のPCが付与される。これらのICT環境を常に授業に活用できるよう、環境整備や効果的な実践の情報交換を行う。指導を工夫し、PCを活用した授業を通じて情報教育の力を高めていく。
	学校経営協議会、地域、保護者と協力し、学習支援ボランティアの充実を図り、授業以外での地域の支援も取り入れた学校作りの基盤を作る。	2	3	消毒ボランティアのおかげで、教員は教材研究や打ち合わせに時間をかけることができたが、教員の意識がまだ低いところがある。今後も協力を得て、学習支援ボランティアの活用を行う。CSだよりを中心に、保護者・地域・教職員に活動を広めていく。	2	4	・コロナ禍でのボランティアの活用は難しかったが、学校が求める人材を呼びかけ、協力が得られるための工夫が必要である。	CSプロジェクトチームの取組により、消毒ボランティア、体力テスト計測ボランティアの協力を得ることができた。ボランティアの活動を通して教職員の意識が変わってきた。今後も多くの保護者や地域の方々に協力していただけるようCSだよりやHPを活用して周知し、これまで以上に開かれた学校を目指す。